

沖縄県における女子大学生の人称表現¹

高橋 美奈子

1. はじめに

今年は、4月からNHKで放映されている朝の連続テレビ小説「ちゅらさん」²の人気の影響で、今まで沖縄を一度も訪れたことがなかった人々も沖縄の生活やそこで使われている言葉を見聞きし、少なからず興味を抱いたのではなからうか。しかし、沖縄県での興味深い言語使用はテレビに放送されている限りではない。本稿では、沖縄県在住女子大学生の学校内での人間関係における人称表現使用の実態に焦点をあて、その気づかれざる方言用法について考察することを目的とする。

2. 学生の人称表現における先行研究

2.1 学生の自称詞

中学・高校生といった学生が被験者である自称詞・対称詞の先行研究は、これまで数多くなされている。学生の自称詞については、最近のものでも吉田(1990)、杉戸・尾崎(1997)、小林(1997)がある。これらの調査結果は、多少の順不同があるものの、東京都の中高生の男子学生は自称詞として「ぼく」「おれ」を多用し、女子学生は「わたし」「あたし」が圧倒的に多いという結果は共通している。また、山形県内の中学生を被験者とした杉戸・尾崎(1997)の調査でも、男女ともに方言形式の「おい」という自称詞が加わるものの、「わたし」「あたし」「ぼく」「おれ」も共に多く現れている。

しかし、学生はどんな相手に対しても「わたし」「あたし」「ぼく」「おれ」の自称詞のみを使っているわけではない。小林(1997)の調査では家庭内においては女子高生に、自分の「名前³」を自称したり、「親族名称」を使ったりする者が目立つことを指摘している。このことについて小林(1997: 20)は「家族の中で、子どもが自分の名前、愛称、また親族名称を自称とするの

は、親をはじめとする年長者が自分をそう呼ぶことに端を発しており、多くは家庭内でのみ通用する、いわば幼児的自称である」と述べている。吉田(1990)や田窪(1997)もまた「名前」を自称することについて、子供や小学生の使用では見られるが、成人を話し相手としたときや公的場面では許容されないことから、幼稚化現象であると論じている。

2.2 学生の対称詞

学生の対称詞についての研究は、八代(1983)、吉田(1990)、金丸(1993)、小林(1998)、塚田・尾崎(1998)、長島(1998)があり、大きく「学生同士の対称詞」、「教師から学生への対称詞」、「学生から教師への対称詞」についての研究に分けられる。調査結果と調査方法の多少の異同はあるものの、学生同士の対称詞では、男子学生に対する場合には「姓のみ」と「姓+くん」が多用され、女子学生には「姓+さん」「名前のみ」が多用されるという結果は共通している。上級生に対しては「先輩」が圧倒的に多く、次いで「姓+さん・くん」が多用され、下級生に対しては「あだ名」や「姓」の呼び捨て、「姓+さん・くん」が多い結果が報告されている。また、教師から学生へ向けての対称詞では、男子学生へは「姓+くん」「姓」の呼び捨てが多く、女子学生へ向けては「姓+さん」「姓」の呼び捨てが多用されるというのが主な結果である。この結果とやや異なるものとして、宮城県の学生を被験者とした金丸の調査では、教師から学生への対称詞として「姓」の呼び捨てと同等の比率で「名前」の呼び捨ても多い結果を示している。しかし、尾崎(1998)では、東京都内の学生を対象とし「教師からどのように呼ばれたいか」の意識調査をしたところ、教師から「姓の呼び捨て」をされること以上に「名前の呼び捨て」をされることを「嫌い」と答えている学生が多いという結果であった。このことから、尾崎(1998:40)は「呼び捨ての中でも(教師の学生への)『名呼び捨て』の適用は難しいようである」と結んでいる。

また、この他の対称詞研究では、尾崎(1999)が「学生が友人に向けて教師・上級生をどのように言及するか」という対称詞の地域差を見る調査を行い、関西では東京に比べ心理的距離感の相違から、教師や上級生を「姓+さ

ん」と言及する比率が高いという結果を報告している。

こうしてみると、これらの自称詞・対称詞の先行研究の調査結果から、学生が自称詞として「名前」を使用することは年齢が上がるにつれて困難になり、「わたし」「あたし」「おれ」「ぼく」といった自称詞が主に使用されていることが分かる。また、対称詞においても、「名前」の呼び捨てというのは、学生同士の中における女子学生に対してのみ多用され、それ以外の学校内の人間関係においては、「姓」の呼び捨てや「姓+接尾辞⁴」のような「姓」を含む対称詞が主で、「名前」を含む対称詞は多くは見られない。しかし、こうした結果は日本語社会では普遍的なものではあるまい。前述した金丸(1993)、杉戸・尾崎(1997)、尾崎(1999)の調査で見られたように自称詞・対称詞の使用における地域差は軽んじることができないであろう。したがって本稿では、地理的にも他府県と離れた沖縄県における女子大学生の自称詞・対称詞の実態調査から、日本語における自称詞・対称詞の多様性を検証する。

3. 調査方法

本稿における調査は、2001年6月から7月にかけて、沖縄県内の大学1年生から4年生までの女子56名を対象に行った。人称表現の使い分けにおける地域差を分析するため、沖縄滞在期間の長さによって、被験者を沖縄県内者28名と沖縄県外者28名⁵の2つのグループ⁶にわけた。調査では様々な話の相手⁷や場面で使う自称詞・対称詞について、最もよく使う(使うことがある)人称表現を数に制限なく選択肢⁸から選んでもらい、各項目ごとにその頻度を合計し、分析した。具体的なアンケートの調査項目は、①各相手・場面で自分のことを何と言及するか(自称詞)、②各相手のことを何と呼ぶか(対称詞)、③各相手から自分は何と呼ばれているか(自己への対称詞)、④各相手から自分は何と呼ばれたいか(対称詞の意識調査)の4項目である。沖縄県内者(以後「県内者」と称する)と沖縄県外者(以後「県外者」と称する)の比較のみならず、前章で挙げた先行研究の調査結果との比較検討を試みるため、話の相手・場面、自称詞の選択肢を始めとする調査方法は小林(1997)を参考にしたが、本稿では紙数の都合により主に学校内の人間関係のみに焦

点を当てた。

4. 分析

4.1 自称詞の使用率

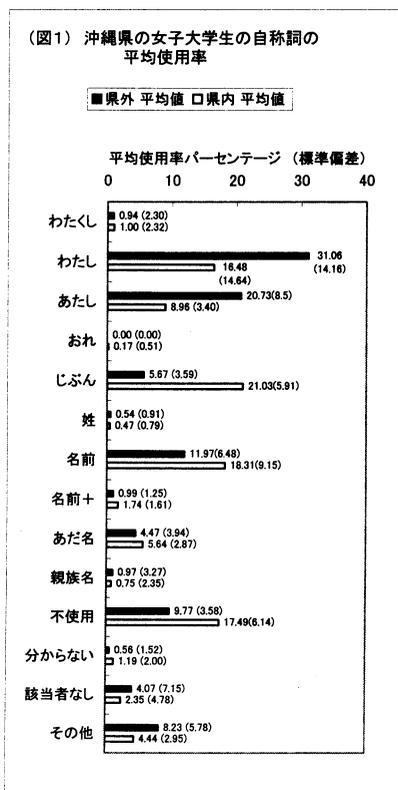
図1は本稿での調査における各相手・場面に対する自称詞の使用率の平均値と、場面ごとの使い分けの幅を示す為の標準偏差を表したものである。県外者では「わたし」（使用率31.06%）と「あたし」（使用率20.03%）の自称詞の使用率が最も高く、前出の吉田、小林、杉戸・尾崎における中高生の主に使う自称詞の結果と同様である。だが、県内者では「じぶん」（使用率21.03%）と「名前」（使用率18.31%）

が最も高くなっており、「あたし」の使用率は8.96%と低い比率である。

県内者においては、先行研究結果や県外者の自称詞使用に見られるような自称詞「あたし」が一般的に用いられているとは言いがたい。「あたし」の使用は東京を中心とした共通語圏の方言用法であると考えられる。

また、金丸（1993：110）では『わたし』は女性が自分を表す語として、ややフォーマルな場面からインフォーマルな場面まで、最も広く一般的に用いられている」と論じているが、本稿における県内者の「わたし」の使用率の標準偏差が14.64%と他の自称詞のそれよりも高いことから、自称詞「わたし」は場面による使い分けが大きいことがわかる。これに

対し「じぶん」の標準偏差は5.91%であり、県内者にとって自称詞「じぶん」⁹



は場面を問わず平均的に使えることが予測できる。

前章で述べたように、「名前」を自称詞とすることは、幼稚化現象であるとされている。しかし、県内者においては、東京の中高生よりも年齢が上にも関わらず、「名前」の自称を多用している。この結果から、沖縄県内においては、「名前」の使用は必ずしも幼稚なイメージを伴うばかりではなく、例えば親しさなど、何か肯定的な別の要素を含有しているのではないかと考える。実際に県外者に聞き取り調査を行ったところ、ほぼ全員、沖縄県の女子大学生は「名前」の自称が多いと回答した。もし従来言われているように「名前」の自称が幼稚なイメージのみを想起するのであれば、中学・高校時代に「わたし」を使っていた県外者が「名前」に交替するのは困難を伴うに違いない。そこで県外者のみを対象として、「沖縄県に来てから自称詞が変化したか」と質問したところ、28人中10名が「変化した」と答えた。「変化しない」と答えた18名のうち3名はもともと「名前」を使用していたのであえて変える必要はなかったと答えている。また「変化した」と答えた10名中8名が沖縄県内で使用する自称詞と県外で使用する自称詞を使い分けていると答えている。このような小規模な調査からでは断定できないが、県外者は地元では「名前」を自称することが難しいが、沖縄県内であれば許されると考えていることがわかる。この結果は少なくとも沖縄県内においては「名前」の自称のイメージするものが本土とは多少異なると解せる。また、一般に自称詞は年齢が上がるに従い変化すると言われているが、この調査により地域を移動することによっても変化しうることが明らかになった。

4.2 相手・場面による人称表現の使い分け

4.2.1 教師—学生間の人称表現の使い分け

次に相手別に県内者と県外者がどのような自称詞・対称詞を使用しているかを考察する。本稿では学校内の人間関係のみに焦点を当てているので、まずは教師に対する場合を分析し、次の項で学生同士の場合を扱う。図2は教師に対する場合の自称詞の使用率を表示したものである。自称詞の選択肢では頻度の高いもののみを示し、それ以外は全て「その他」の項目に換算した。

大学の先生には両グループともに「わたし」が最も高い比率である。しかし、中学高校の先生に対する場合、県内者は「名前」が20.4%と県外者の7.5%に比べ、かなり高い。前述した先行研究では「名前」を自称することは公的な場では許容されないと論じられている。図2の結果から、沖縄県内での中学高校の場のあり方が、より私的な場であり、共通語圏とは異なることがわかる。

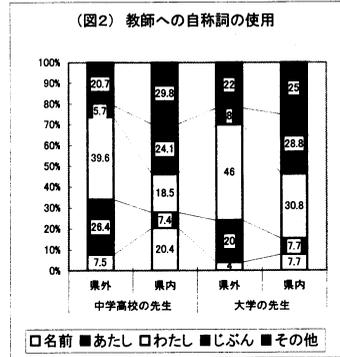
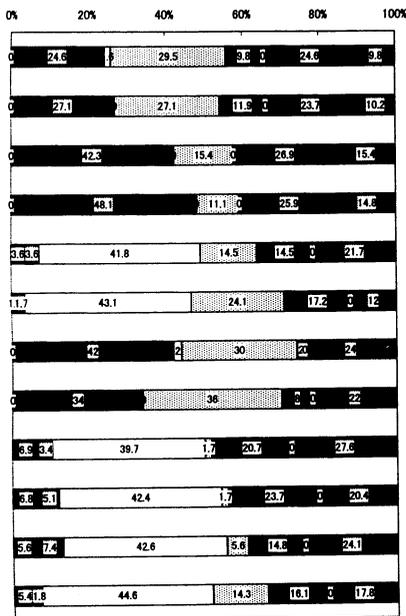


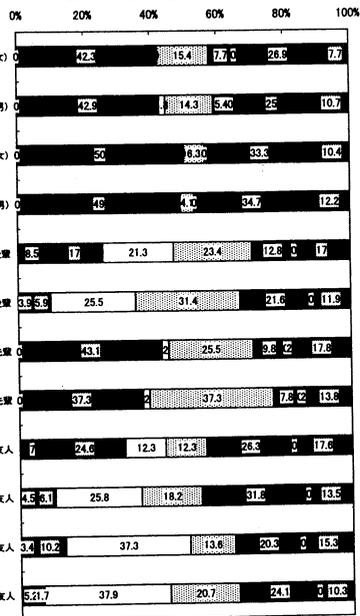
図3と図4は教師への対称詞の使用率結果である。中学高校の先生を相手とする場合、県内者は「姓+接尾辞」と「名前+接尾辞」の使用率がほぼ同じ割合であるのに対し、県外者では「姓+接尾辞」が「名前+接尾辞」を大きく上回っている。県外者は東京都の学生を対象とした先行研究結果と同様、「姓」を含む対称詞を好み、教師との距離を置いた表現が多用されている。

次に被験者が「教師からどう呼ばれているか」の結果を図5と図6に表示した。県内者の約40%前後が中学高校の先生に「名前」で呼ばれていると回答している。一方、県外者が中学高校の先生から「名前」で呼ばれる比率は約10%前後と県内者に比べるとかなり低く、「姓+接尾辞」が最も多い結果となっている。県内者の多くが中学高校の先生から「名前」で呼ばれているという結果は、県内者が中学高校の先生に対して「名前」の自称が多いという結果と呼応していると思われる。この点は家庭内で子供が家族から「おねえちゃん」のような親族名称で呼ばれるがゆえに自らも「おねえちゃん」と自称することに似ている現象だと言えるかもしれない。更に、「教師からどう呼ばれたいか」という意識調査結果では、県内者の約70%が中学高校の先生から「名前」で呼ばれたいと回答している。これは、前掲した尾崎（1998）の高校生を対象に「先生から名前で呼ばれることが好きか嫌いか」と聞いた調査結果で、「名呼び捨て」を「好き」と答えた人が「姓の呼び捨て」よりも少なかった結果を考えると、調査方法は異なるものの興味深い結果と言える。

(図3) 沖縄県内者の対称詞の使用

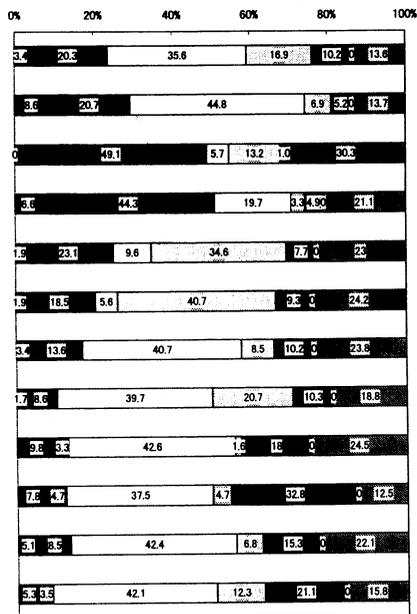


(図4) 沖縄県外者の対称詞の使用

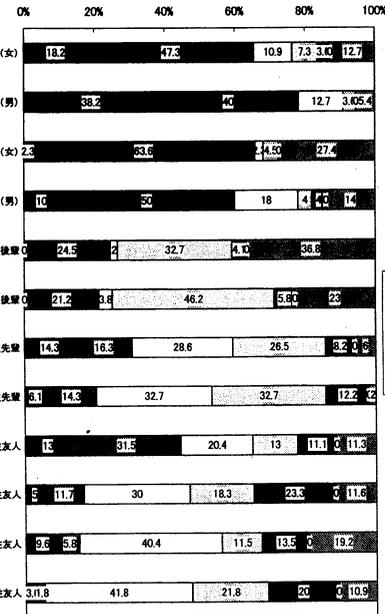


■ 姓
 ■ 姓+名前
 □ 名前
 ■ あだ名
 □ 親族名
 ■ 役職名
 ■ その他

(図5) 沖縄県内者の呼ばれ方



(図6) 沖縄県外者の呼ばれ方



■ 姓
 ■ 姓+名前
 □ 名前
 ■ あだ名
 □ 親族名
 ■ その他

つまり、教師に対する人称表現では、大学の先生を相手にした場合には両グループ間の人称表現使い分けにおける際だった相違は見られなかった。しかしながら、中学高校の先生に対する場合では、県内者が先生と「名前」で呼び呼ばれあう関係が築かれている一方で、県外者は先行研究結果同様「姓」を含む対称詞の多用といった教師と距離を置いた関係を好むことが明らかになった。

4.2.2 学生同士の人称表現の使い分け

次に学生同士の人称表現の使い分けについて考察する。図3と図4の各相手への対称詞の使用率結果を見ると、特に後輩、中学高校の異性の友人に対しては、両グループの対称詞使用の用法に違いが見られる。まず、後輩に対して、県内者は同性・異性問わず「名前」の呼び捨てが40%以上の高い比率を示すのに対し、県外者では後輩に対し「名前」の呼び捨てより「名前+接尾辞」を多用している。特に異性後輩に対しては「姓+接尾辞」(17%)が「名前」の呼び捨て(21.3%)について高い比率となっており、県内者の使用では見られなかった後輩の性差による対称詞の用法の区別も見受けられる。同じく相手の性によって対称詞の使用が異なるのは、中学高校の異性の友人を相手にした場合である。県内者は中学高校の友人には同性・異性を問わず「名前」の呼び捨てが多い。一方、県外者は中学高校の同性友人には「あだ名」(31.8%)と「名前」の呼び捨て(25.8%)を多用しているが、異性友人には先行研究結果と同様に「あだ名」(26.3%)と「姓+接尾辞」(24.6%)が多く、「名前」の呼び捨ては12.3%と低い使用率である。だが、県外者は大学の異性友人に対しては、同性友人と変わらず「名前」の呼び捨てがもっとも多い。このような異性に対する対称詞の変化は、県外者が来沖後、県内者の使用に同化した結果、起こったと考えられる。また、県外者では、大学の友人、中学高校の友人に対して「名前+接尾辞」の使用が見られるが、県内者においては、大学の同性友人相手以外、「接尾辞」の使用はほとんど見られない。県内者のこの結果は、先行研究で接尾辞「くん・さん」が多用されていた結果と相反しており興味深い。紙幅の都合により別稿で論じたい。

図5と図6の相手からの呼ばれ方で、県内者と県外者の結果が異なるのは、やはり中学高校時代の異性友人を相手にした場合で、県内者の42.6%が中学高校異性友人に「名前」で呼ばれていると回答している。一方、県外者が中学高校異性友人から「名前」で呼ばれる比率は20.4%と県内者に比べるとかなり低く、「姓+接尾辞」(31.5%)が最も多い結果となっている。また、前述した「対称詞の使用率」でも見られたように、県外者では中学高校の友人が相手の場合、相手の性によって呼ばれ方が異なるが、大学の友人相手では、性差は見られない。更に、県外者は県内者よりも「名前+接尾辞」で呼ばれることが多い。このような「接尾辞」使用の結果は、先ほどの相手と呼ぶとき同様に、「名前」の呼び捨てのような直接的に相手の領域に踏み込む表現を避けた方策であると思われる。

最後に、「相手からどう呼ばれたいか」という意識調査結果では、両グループ共に図5と図6で表示した実際に呼ばれる割合より、どの相手の場合も「名前」の呼び捨てをしてほしいという割合が増加していた。特に県外者の中学高校異性友人を相手にした場合では、46.4%もの県外者が「名前」の呼び捨てを望んでおり、相手の性差による相違が小さくなっていた。

つまり学生同士の対称詞においては、県外者は話の相手の性により対称詞を使い分けることもあるが、県内者では相手の性が対称詞の選択に影響を与えていないことがわかる。また、前述した中学高校の先生に対する場合同様、県内者は「名前」のような個別的な対称詞をより好むが、県外者は「接尾辞」が付加された対称詞や「姓」を含む対称詞を好む。しかし、意識調査でみたように、県外者も「名前」の呼び捨てで呼ばれることを欲しており、「名前」の呼び捨ては肯定的に評価されているものの、現実では使いづらいことが明らかになった。

5. 結論

今回の調査では人称表現の中でも方言形式ではなく、共通語形式に焦点を当てたことにより、共通語形式の気づかれざる方言用法—「名前」や「じぶん」の自称詞の多用や中学高校の先生との「名前」で呼び呼ばれあう関係、

学生間における性差の見られない「名前」の呼び捨て対称詞の多用一が確認できた。また、県外者の用法から沖縄県で生活することにより自称詞・対称詞ともに変化しうることも明らかにした。

一般的に吉田（1990）が述べるように、家庭は「ウチ」で学校は「ソト」とみなされるが、人称表現の用法を分析した限りにおいては、沖縄社会では中学高校も家庭の延長線上にあり「ウチ」とみなされているのではなかろうか。現在も沖縄県で老若男女問わず非常によく使われる言葉に、沖縄県内出身者（「ウチナンチュー」）と沖縄県外出身者（「ヤマトンチュー」「ナイチャー」）を区別する言葉がある。また、内間（2000）は琉球方言の言語表現を構造的に分析することにより、沖縄社会の持つ自他一体化を指摘している。内間は、その一体化について次のように説明している（25-26）。

一体化志向というのは、無意識的に相手を我と同一視し、我との同一化をはかる心の働きである。その同一視・同一化の構成員に成れば、そこはきわめてぬくもりのあるあたたかい社会となる。

このように、琉球方言の中にある「ウチ」なるものとしての一体化のあたたかさが、互いを「名前」で呼び合うことを許し、同時に、「名前」で呼び合うことにより「ウチ」の人間関係が強化されるのではなかろうか。また、自称詞についても、従来言われるように家庭内では「名前」を自称することが許容されるのであれば、沖縄社会では中学高校という場や友人関係における場は「ウチ」の場であり、「ウチ」の人間関係であるがゆえに、「名前」の自称が多用されると考える。

新たな人間関係を築く上で、人称表現の選択は必須である。本調査において県外者は地元と沖縄とで人称表現の使い分けを行っていた。なぜなら本調査で検証したように、地元では「名前」を含む人称表現使用には人間関係や場面に制約があるからだ。このように、地元でタブーとなっている人称表現が、沖縄社会での一構成員としての証であるとすれば、そこには沖縄社会で新たな構成員として自分の位置づけを決定する上での葛藤が起きるのであろう。また県外者が地元と沖縄とで人称表現の使い分けを行っていたように、県内者が県外に移住した際にもそのような使い分けは起こりうる。今後の課題と

して、沖縄社会から共通語圏に移住した県内者の呼称の使い分けとその社会での構成員との関係性を探る必要があるだろう。

註

- 1 「人を表す言葉」についての名称は数多くある。西洋語の文法人称代名詞に基づいた「人称代名詞」や話し相手呼びかけたり言及したりする語として「呼称」と名づけている研究論文も多々あるが、本稿では「自分自身を言及する語」と「相手呼びかける（言及する）語」に焦点を当てているため、鈴木（1973）が定義づける「自称詞」「対称詞」を用いる。鈴木（1973：146）では「話し手が自分自身に言及することばのすべてを総括する概念」を「自称詞」、「話し相手に言及することばの総称」を「対称詞」と定義している。また、本稿では「自称詞」「対称詞」を総称して「人称表現」という用語を使っている。
- 2 「ちゅらさん」とは沖縄方言（ウチナー口）で「美しい」という意味の形容詞である。2001年4月から10月までNHKで放映された連続朝のテレビ小説「ちゅらさん」は、豊かな自然に恵まれた沖縄県小浜島に生まれ育った「えりい」こと「古波蔵恵理」が家族の愛情や様々な人々との出会いを通じて成長していく様子を描いた物語であり、平均視聴率も22.2%（琉球新報9月29日付け調べ）と、高い視聴率を記録したドラマである。
- 3 本稿で「名前」と言う場合、フルネームのことではなく、下の名前を指す。
- 4 本稿で「接尾辞」と呼んでいるのは「名前」や「姓」の後につく「ちゃん」「くん」「さん」や「おねえちゃん」「にいちゃん」のような親族名称、「先輩」「先生」のような役職名称を全て含んだものである。例えば対称詞で「美奈子先生」と呼ぶと答えた場合、このケースは「名前+接尾辞」にカウントされる。
- 5 沖縄県外者の最も滞在歴の長かった地域の内訳は、九州地方14名、近畿地方3名、中部地方6名、関東地方2名、東北・北海道地方3名である。東京都出身者は全くいない。
- 6 被験者を滞在歴によって分けたのは、出身地が沖縄県外であっても、その後小学校から大学まで沖縄県に滞在していたり、出身地が沖縄県であっても、その後県外に滞在していたりする被験者がいたためである。被験者の平均滞在歴と平均年齢は以下の通りである。

被験者の年齢

	人数	平均年齢（標準偏差）	最小値	最大値
沖縄県内者	28人	19.93歳（1.25）	18歳	23歳
沖縄県外者	28人	19.79歳（1.26）	18歳	22歳

被験者の沖縄県滞在歴

	平均滞在歴(標準偏差)	最小値	最大値
沖縄県内者	228.04ヶ月(34.58)	107.0ヶ月(8.9年)	264.0ヶ月(22年)
沖縄県外者	19.38ヶ月(13.43)	3.0ヶ月	40.0ヶ月(3.3年)

- 7 自称詞についての問での話の相手・場面は小林(1997)を参照した以下の19種類である。
- ①恋人、②大学の同性の友人、③大学の異性の友人、④中学高校時代の同性の友人、⑤中学高校時代の異性の友人、⑥同性の先輩、⑦異性の先輩、⑧同性の後輩、⑨異性の後輩、⑩大学の先生、⑪中学高校の先生、⑫両親、⑬兄姉、⑭妹弟、⑮祖父母、⑯親戚や知り合いの大人、⑰初対面の大人、⑱進学・就職などの面接、⑲作文(⑰、⑱は自称詞の調査のみ使用)、また、対称詞については、相手の性差による対称詞の違いを検討するため、中学高校の先生、大学の先生が相手の場合には更に性によって分けて聞いた。
- 8 自称詞の選択肢については小林(1997)に基づいて作成した。また、対称詞の選択肢については一般的に使うであろう対称詞を全て選択肢に取り入れ、それ以外は「その他」の項目として自由記入とした。
- *自称詞の選択肢:「それぞれの相手と話すときに自分のことを何と言うか」
- ①あたし、②わたし、③わたし、④ぼく、⑤おれ、⑥じぶん、⑦自分の名字、⑧自分の名前、⑨自分の名前+ちゃん(くん)、⑩親族関係を示す呼称、⑪あだ名、⑫何と言うか分からない、⑬該当する人物が思い浮かばない・該当者がいない、⑭不使用、⑮その他(自由記入)
- *対称詞の選択肢:「それぞれの相手と話すときに相手のことを何と呼ぶか」「それぞれの相手から何と呼ばれているか」
- ①あなた、②きみ、③あんた、④おまえ、⑤名字の呼び捨て、⑥名字+さん・くん・ちゃん・親族呼称・役職呼称、⑦名前の呼び捨て、⑧名前+ちゃん・くん・さん・親族呼称・役職呼称、⑨親族関係を示す呼称、⑩あだ名、⑪何と言うか分からない、⑫該当する人物が思い浮かばない、該当者がいない、⑬不使用、⑭役職呼称、⑮その他(自由記入)
- 9 「じぶん」という人称表現は自称詞としては特に沖縄県内者に見られたが、対称詞としては一例もなかった。これは、対称詞の選択肢に「じぶん」という項目を特に設けなかったことが一因していると思われるが、自由記入ができる場を「その他」として設けたにも関わらず、「じぶん」と書く者は一人もいなかった。この「じぶん」という人称表

現について、田窪（1997）では、対称詞としての「じぶん」は関西地域で一部使われる用法で、自称詞の「じぶん」は中国地方や軍隊用語として使われると述べている。また、金丸（1993）でも「じぶん」は男性専用語として紹介されており、「じぶん」の自称詞が多用される場として、上下関係が厳しい警察や自衛隊などの職場を挙げているが、軍隊用語の連想から好まれないことも多いと報告している。沖縄県における「じぶん」の自称詞以外の用法は今後の調査が必要であろう。

引用文献

- 内間直仁（2000）「一体化志向のぬくもりと危うさ—琉球方言を通して—」『日本語学』7月号（明治書院）pp. 17-26
- 尾崎喜光（1998）「生徒たちはどう呼ばれたいと思っているか」『日本語学』8月号（明治書院）pp. 37-40
- 尾崎喜光（1999）「对人的心理距離の東西差—関西の高校生の言語使用に見る—」『日本語学』11月臨時増刊号（明治書院）pp. 237-243
- 金丸芙美（1993）「人称代名詞・呼称」『日本語学』5月臨時増刊号（明治書院）pp. 109-119
- 小林美恵子（1997）「自称の獲得—高校生へのアンケート調査から—」『ことば』18号（現代日本語研究会）pp. 12-26
- 小林美恵子（1998）「学校の呼称—女性教師の呼称『〜クン』を中心に—」『日本語学』8月号（明治書院）pp. 32-36
- 杉戸清樹・尾崎喜光（1997）「待遇表現の広がりとその意識—中高生の自称表現を中心に—」『月刊言語』6月号（大修館書店）pp. 32-39
- 鈴木孝夫（1973）『ことばと文化』（岩波新書）
- 田窪行則（1997）「日本語の人称表現」田窪行則（編）『視点と言語行動』（くろしお出版）
- 塚田実知代・尾崎喜光（1998）「中学・高校のクラブ活動・部活動における呼称」『日本語学』8月号（明治書院）pp. 41-44
- 長島裕輔（1998）「大学の体育会における呼称」『日本語学』8月号（明治書院）pp. 45-49
- 八代京子（1983）「高校生の呼称」F. C. パン他編『機能によることばの分析』（文化評論出版）
- 吉田裕久（1990）「学校における先生・子供の呼称」『日本語学』9月号（明治書院）pp. 25-31

（たかはし みなこ）